

イメージ介入による漢字指導の試み

福岡 寿美子（姫路獨協大学言語研究所）

1. はじめに

日本語教育における漢字指導は、文法・文型説明等に多くの時間をとられ、限られた時間に追いやられがちである。また、一斉説明をする一方で、漢字は時間をかけて覚えるしかない、自分でやるしかないと学習者任せにされてきた傾向がある。特に、非漢字圏の学習者にとっては、漢字学習の負担は大きく、より効率的な漢字指導が必要である。

そこで、本稿では、非漢字圏の学習者に対する初級漢字の読みの指導に関して、イメージを導入させることによって記憶を促し、効率的に漢字指導を行うことを試みた。

また、その方法として、学習者と一対一で向かい合えるインタビューを行うことによって、今までの一斉指導ではなく、一人一人の学習者に合った個別的な漢字指導を行った。

このようなインタビューを用いたイメージ介入による漢字指導によって得られた、学習者一人一人の事例を考察することによって、今後の日本語教育におけるより良い漢字指導について考えたい。

2. イメージ介入による漢字指導

日本語教育におけるひらがな指導において、アソシエーション法という教え方がある。アソシエーション法とは、絵の中のひらがなと、その絵の示す語の最初の音節とのマッチングで、ひらがなの字形とその音とを結びつけようとするものである。（永保 1987）

このアソシエーション法は、単に英語圏の学習者を対象にしたものだけではなく、フランス語圏の学習者に対しても、「フランス人のための五十音図」（江副 1987）などがある。

また、「50分ひらがな導入法—〈連想法〉と〈色つきカード法〉の比較—」（カッケンブッシュ他 1989）では、教材として *Hiragana in 48 minutes* (Quackenbush and Ohso, 1983) を用いている。*Hiragana in 48 minutes* に基

づいた教授法では、イメージや奇抜な“ごろあわせ”などをもとに、文字（ひらがな）と音（読み）との連合を形成する技法、すなわち「連想技法」がその骨格をなしている。我々の記憶の特性として、無意味なものは記憶しにくい、具体的なイメージをいただいたものは記憶に残りやすいということがある。

そこで、このようなイメージ（連想）によるいくつかのひらがなの教え方をもとに、これらを漢字の読みの指導に応用しようと試みたのである。つまり、学習者に漢字を見せ、自由にイメージを想起させることによって、より記憶を確かなものにして、漢字の読みをより早くより確実に、しかも、学習者自身の各々に合った方法で学習させようと考えた。

3. 漢字指導の実施

漢字指導は、1992年9月1日～11月30日の3か月間にわたって、一対一で学習者と向かい合えるインタビューによって行った。インタビューに要した時間は、30分～150分で、各個人に応じて行った。インタビューは、教室、会議室、ロビーなどインタビューしやすい状況のもとで行った。

3.1 学習者

漢字指導をした学習者は20名で、いずれも姫路近辺に住む非漢字圏の外国人男女（20代～30代）である。その多くは語学教師をしており、漢字の読みに関する学習歴は初級から初級後半である。表1に学習者を示す。

（表1） 学習者

非漢字圏 20名 (男11名、女9名)					
学習者	国籍	年齢	性別	職業	
1 A	タイ	20代	女	主婦	
2 B	オーストラリア	20代	男	語学教師	
3 C	アメリカ	20代	女	語学教師	
4 D	アメリカ	20代	男	語学教師	
5 E	トルコ	20代	女	語学教師	
6 F	イギリス	30代	女	語学教師	
7 G	アメリカ	30代	男	語学教師	

8	H	カ	ナ	ダ	20代	女	語学教師
9	I	カ	ナ	ダ	20代	男	語学教師
10	J	ア	メ	リ	20代	女	語学教師
11	K	ア	メ	リ	20代	男	語学教師
12	L	カ	ナ	ダ	20代	男	語学教師
13	M	イ	ギ	リ	20代	男	語学教師
14	N	ト	ル	コ	30代	男	技術者
15	O	ア	メ	リ	30代	女	語学教師
16	P	ア	メ	リ	30代	男	語学教師
17	Q	ブ	ラ	ジ	30代	女	留学生
18	R	ア	メ	リ	20代	男	語学教師
19	S	ア	メ	リ	30代	男	語学教師
20	T	イ	ギ	リ	20代	女	留学生

漢字圏の学習者にも同様に、イメージ介入による漢字インタビューを試みた
が、彼らはすでに知っているものに対しては、イメージは浮かばないという答
えであった。したがって、このイメージ介入による漢字指導は、特に非漢字圏
の学習者にとって有効かと思われる。

3.2 インタビューに使用した漢字カードの漢字

漢字カードは1字、2字、3字のものを各々10枚、合計30枚を標準形と
し、更に学習者の漢字の読みのレベルに応じて、より簡単で基本的な1字の漢
字カードを20枚（2段階）と、より難しい抽象語句も含めた2字の漢字カー
ドを21枚（2段階）、合計71枚用意した。次に漢字カードの漢字を示す。

[1字のもの]

1「男」 2「女」 3「父」 4「母」 5「口」 6「目」 7「手」
8「足」 9「山」 10「花」

[2字のもの]

11「大学」 12「先生」 13「電話」 14「病院」 15「銀行」
16「結婚」 17「公園」 18「旅行」 19「平成」 20「料理」

[3字のもの]

21「十万円」 22「月曜日」 23「日本語」 24「飛行機」 25「美術館」
26「兵庫県」 27「自動車」 28「姫路駅」 29「郵便局」 30「冷蔵庫」

[1字のもの] (基本的な漢字)

31「一」 32「二」 33「三」 34「四」 35「五」 36「六」 37「七」
38「八」 39「九」 40「十」
41「人」 42「子」 43「火」 44「水」 45「大きい」 46「小さい」
47「上」 48「下」 49「月」 50「木」

[2字のもの] (抽象語句も含めた初級漢字には多少難しい漢字)

51「手紙」 52「音楽」 53「勉強」 54「練習」 55「家族」
56「自由」 57「問題」 58「全部」 59「研究」 60「教育」
61「新聞」 62「会社」 63「天気」 64「写真」 65「病気」
66「医者」 67「時間」 68「住所」 69「世界」 70「経済」
71「政治」

これらの漢字は『日本語(にほんご／につぽんご)』〈小出詞子 1985 開拓社〉と『日本語初歩』〈国際交流基金日本語国際センター 1981 凡人社〉の2冊に提出されている重なり漢字300字と漢数字10字(一～十)を加えた310字に、更に、「兵庫県」「姫路駅」など、学習者が日常よく見かける地域性のある漢字や、「郵便局」「冷蔵庫」など語彙として身近でよく知っているものの漢字を加えたものである。

3.3 インタビューの方法

漢字カード(約8cm×8cm)を学習者に見せ、漢字の読みを記憶する手助けとなるよう自由にイメージを想起させ話を創らせる。

最初に10枚の漢字カードを、カルタ形式のようにアトランダムに並べ、読めるものは学習者に読んでとらせる。読めるものはその語彙の意味もわかっているものが多いが時々例外もあるので、ここで読めるものも読めないものも合わせて教師が漢字を読んで、その意味を学習者の母語(主に英語)で言わせ確認し、わからないものについては教える。

次に、読めなかった漢字に関して、改めて教師が読みを言い学習者に記憶させる。その際、学習者に漢字を見せて自由にイメージさせ、各自の記憶を促すように話を創らせる。

同様にして、10枚ずつを単位に順に行う。どの段階の漢字カードから始めるかは、インタビューの最初の学習者とのやり取り、つまり、学習者の国籍や仕事、日本語学習歴や漢字学習に対する考えなどを聞くことによって、教師が判断し一人一人に応じて行う。したがって、それぞれの学習者の漢字の読みのレベルによって、どの段階のどの漢字カードを、何枚学習したかはそれぞれ異

なる。このような方法によりイメージを想起させることによって、少ない者でも20個、多い者では40個の新しい漢字の読みを記憶し学習することができた。

4. 事例分析及び考察

4.1 イメージを想起しやすい漢字としにくい漢字

漢字インタビューを行うことによって、イメージを想起しやすい漢字とそうでない漢字があることがわかった。次にその代表的なものを示す。

(1) イメージを想起しやすい漢字

「飛行機」「病院」「郵便局」「料理」「住所」「音楽」「家族」「電話」「公園」「冷蔵庫」「美術館」などである。「飛行機」「郵便局」はそれぞれ総画数が31画、27画と大きく、形も複雑であるが、そのほうが糸口がつかみやすく、イメージを想起しやすいという意見が学習者によって得られた。

(2) イメージを想起しにくい漢字

「一」～「十」「口」「目」「山」「小さい」「上」「下」「月」「木」「人」「子」「火」「水」「大きい」「男」「女」などである。これら画数が小さく簡単な漢字は、イメージを想起しにくいということがわかった。

したがって、このイメージ介入による漢字の読みの指導に関しては、初級漢字のなかの画数が大きく複雑な漢字でも、早い時期から効果的に指導することができるといえる。

4.2 イメージのパターン

漢字を覚える時、役に立つのは、字体と意味とを関連させる覚え方である。この際、「字体と意味との関連は、コジツケでよいのであり、学習者自身でそのコジツケを考えてもよいのである。」と武部(1986)は述べている。

この考えをふまえインタビューによって、学習者にできる限り自由にイメージを想起させストーリーを創らせた。その主なものについて分析すると、想起されたイメージはいくつかのパターンに分かれることがわかった。

また、「漢字を読む過程には、漢字を形として認知するパターン認識の過程と、漢字形にオト(音)を連合する過程との2つがある。」と海保(1990)は述べている。

これらの考えを基に想起されたイメージを、(A)形と読み(音)が結び付くもの、(B)形と意味が結び付くものの2つに分類した。(A)形と読み(音)が結び付くものは更に、(1) アルファベット、(2) 漢字、(3) カタカナ、

(4) ひらがなと結び付くものの4つに分けられる。次に各々の具体例を示す。

(A) 形と読み(音)が結び付くもの

(1) アルファベット

- ・「全部」の「部」の右側の「**フ**」が「B」に見え、「ゼンプ」の「ブ」と「ビ」が結び付く。
- ・「飛行機」の「飛」の「**フ**」が、「H」に見え、「ヒコウキ」の「ヒ」と結び付く。
- ・「母」は、これを横にすると、「H」が2つ並んでいるように見える。「ハハ」の「ハ」と「H」が結び付く。

(2) 漢字

- ・「日本語」の「語」は、「五」(「ゴ」)があるから、「ニホンゴ」の「ゴ」と結び付く。
- ・「飛行機」の「機」は、「木」(「キ」)があるので、「ヒコウキ」の「キ」と結び付く。
- ・「研究」の読みは、「研究」の「究」(キウ)の「九」と「九」(「キュウ」)が結び付く。

(3) カタカナ

- ・「月曜日」の「曜」の「**ヨ**」は、カタカナの「ヨ」に似ているので、「ゲツヨウビ」の「ヨ」と結び付く。
- ・「一」～「十」の漢字で、「七」と「九」の違いがわかりにくい、「九」はカタカナの「カ」に似ておりカ行の音と「キュウ」が結び付く。

(4) ひらがな

- ・「世界」は、「世」がひらがなの「せ」に似ているので、「セカイ」と結び付く。

形と読み(音)が結び付くもののなかでは、特に、アルファベットの「B」と「H」に結び付くものが多くみられた。

(B) 形と意味が結び付くもの

- ・「飛行機」の「飛」の「**フ**」は形がおもしろく、「wing」(「羽」)に似ている。「機」の右の部分の「**キ**」は、飛行機の中に乗っている人や、エンジンに見える。「**フ**」を「wing」(羽)に結び付けた例は多くみられたので、これはかなり万人に共通したイメージといえるのではないか。
- ・「冷蔵庫」は、「蔵」や「庫」が「棚」に見える。「臣」は、「アイスキューブ」に似ている。「冷」の右側の「令」は、冷蔵庫のドアに、左側の「リ

」は、冷蔵庫のハンドルに見えるなど、すべて冷蔵庫の形態的なことに結び付けてイメージを想起している。

- ・「郵便局」は「郵」「便」「局」の各々の漢字の部分が、切手、パッケージ、手紙、メールボックスなどに見える。
- ・「料理」の「料」は、その形が野菜を切った形や、フライパンの中にいろいろなものが入っている形に似ている。また、「理」の左側の「王」は、「カウンター」に、右側の「里」は、「コック帽」、「料理の鍋」に見える。
- ・「音楽」は、「楽」の「夕」がスピーカー、ステレオ、ボイス、サウンドなどに見える例が多くあり、これも外国人にかなり共通したイメージといえるのではないだろうか。
- ・「写真」は、「真」の「目」の形に注目して、カメラ、ファインダー、写真などをイメージするものが多い。「写」の「与」は、人が座っているように見える。
- ・「電話」は、「電」の「乚」が、家と家をつないでいる電話のコードに見える。「乚」は小さな部分にもかかわらず、多くの学習者がまずここに目を付けイメージを想起させた。「電」の「雨」の部分に結び付けてストーリーを創ったものもあった。
- ・「公園」は、「園」の「口」が、壁やフェンスで、その中は土があり、花や木があり、ブランコなどのおもちゃがあるとイメージし、子供が遊んだり、おじいさんが散歩しているなどのストーリーを創った。

更に、部首となるような基本的な漢字（部分も含む。）の意味をすでに知っていて、それをもとに他の漢字へ連想したり、形からもイメージを想起して、ストーリーを創るものについて試してみる。〈 〉はストーリーを示す。

- ・「問題」の「問」は、「口」があるので言う。「題」の左側の上は「日」、その下の「疋」は、人が座っている。右側には、「貝」があるので、ビーチである。〈人が長い間ビーチで座っていると、日焼けして問題があると、医者が出た。〉

この場合、「口」、「日」、「貝」の意味は知っている。

- ・「全部」の「全」の上の「人」は、王様の帽子（王冠）である。下は「王」である。「部」の左側は、「立」と「口」がある。〈王様は何でも（全部）持っていて、リッチである。王様が話すと全部の人々が立つ。〉

これも、「王」、「立」、「口」の意味は知っている。

- ・「音楽」の「音」の上の部分は、「立」で「人が立つ、起きる」、下の部分は「日」で「日の出で太陽が昇る」、「楽」の上は「白い鳥」である。「夕」

」は鳥の羽である。下は「木」である。〈日の出とともに人が起き、鳥は木の上で歌っている。〉

- ・「結婚」の「結」の右側の「吉」は altar (祭壇) で、「吉」の上の「十」は、「十字架」である。〈結婚は、この祭壇の前で、「婚」の左側の「女」が、「結」の左側の「糸」で結ばれる。〉

漢字をほとんど学習していない者は、単純に漢字の形（漢字を単に図形とみなして）のみからイメージを想起して、自由自在、奇想天涯なストーリーを創る。一方、基本漢字をある程度知っている者は、その漢字（その漢字の部首や部分の場合もある。）の意味や、その漢字を使った熟語から更に、派生させるなどして、ストーリーを創る。（もちろん、その漢字が形的にイメージしやすい時は、単純に漢字の形のみからイメージを想起し、ストーリーを創る。）

このように、想起されたイメージを分類することによって、学習者のイメージの想起にも、その学習者の漢字学習の状況に応じていくつかの段階があることがわかった。

4.3 イメージ介入による漢字の読みの記憶の効果

イメージ介入による漢字の読みの記憶の効果について考える。

難易度が比較的高く大部分が読めない漢字であるという共通項があり、特にイメージ介入による漢字の読みの指導における記憶の効果があつたと思われる3人の学習者（D、J、S）を選び比較検討してみる。

表2にそのデータを一覧する。

表の記号は次の通りである。

「意」…意味：◎…読みも意味も知っている（対象外）一で示す

○…意味を知っている

×…意味を知らない

「イ」…イメージ想起：有…イメージ想起有り

無…イメージ想起無し

「1」…1回目の読み：○…1回目で読めた

×…1回目で読めなかった

「2」…2回目の読み：○…2回目で読めた

×…2回目で読めなかった

（3回目以降は皆読むことができたので、ここでは省略する。）

(表2) イメージの想起と漢字の読みの記憶

学 習 者		D				J				S			
No.	漢 字	意	イ	1	2	意	イ	1	2	意	イ	1	2
51	手紙	○	無	○	/	○	無	○	/	○	無	○	/
52	音楽	○	有	○	/	○	有	○	/	○	有	○	/
53	勉強	○	有	○	/	○	有	○	/	○	有	○	/
54	練習	○	無	○	/	○	無	○	/	○	有	○	/
55	家族	○	有	○	/	○	有	○	/	×	有	○	/
56	自由	×	有	×	○	×	有	○	/	×	有	○	/
57	問題	○	有	○	/	○	有	○	/	○	有	○	/
58	全部	○	有	○	/	○	無	○	/	○	有	○	/
59	研究	×	有	×	○	×	無	○	/	×	有	○	/
60	教育	×	有	×	○	○	無	○	/	×	有	×	○
61	新聞	◎	—	—	—	○	有	○	/	○	無	×	×
62	社会	○	有	○	/	○	有	○	/	○	無	○	/
63	天気	◎	—	—	—	○	有	○	/	×	有	○	/
64	写真	○	有	○	/	○	有	○	/	○	有	○	/
65	病気	◎	—	—	—	○	有	○	/	○	無	○	/
66	医者	○	有	○	/	○	有	○	/	○	無	○	/
67	時間	◎	—	—	—	○	有	○	/	○	無	×	×
68	住所	×	有	○	/	○	有	○	/	×	無	○	/
69	世界	×	有	○	/	○	無	○	/	○	有	○	/
70	経済	○	無	○	/	○	無	○	/	×	有	○	/
71	政治	×	有	×	×	×	無	○	/	×	有	○	/

まず、意味（その語彙）を知らないものは、記憶しにくいということがわかる。例えば学習者Dの場合「自由」「研究」「教育」「政治」の漢字に関しては、意味を知らなかったので1回目の読みの時どれも言えなかった。「政治」に関しては2回目も言えなかった。更に、意味を知らないものはイメージの想起があっても言えないことがわかる。これらのことから漢字の語彙としての意味を知っているかどうかは、漢字の読みの記憶においてもかなり重要なポイント

トであると言える。

次に、イメージの想起が無いと意味を知っていても言えないことがある。例えば、学習者Sの場合「新聞」「時間」においてそうである。Sは「新聞」「時間」の両方とも意味はすでに知っていたが、それらに対するイメージがまったく想起できなかったため、ストーリーも創れず1回目、2回目とも読みを言うことができなかった。また、「手紙」などのようにイメージの想起が無くても読みが言えるものもあるが、大部分のものはイメージを想起することによって、より記憶が確かになり漢字の読みが言える。

つまり、意味を知っていてより豊かにイメージが想起された時、その漢字の読みはよりスムーズに記憶されるということがわかる。

学習者Jはこの21個の漢字熟語はまったくはじめての漢字で、最初はどれも読めなかったが、イメージの想起が豊かで次々とストーリーを創って1回目ですべて記憶することができた。

これらのことから、漢字の読みを記憶する際にイメージを介入させることは効果的であることがわかる。

5. おわりに

非漢字圏の学習者を対象とした初級漢字の読みの指導に関して、イメージを介入させることによって学習者の記憶を促し、効率的に漢字の読みの指導を行うことを試みたが、この方法は「4.3 イメージ介入による漢字の読みの記憶の効果」からもわかるように、かなり効果的な漢字の指導法だと考えられる。

また、その際、学習者と一対一で向かい合うことができるインタビューという方法を用いたので、一斉指導ではなく、一人一人の学習者に合った個別的な漢字指導を行うことができた。これによって、これまでの学習者任せや一斉指導では見えなかった、各々の学習者の漢字学習に要する時間やその過程と型、漢字の目の付けどころなどが明らかになった。

漢字を見せてイメージを想起させ話を創らせると、そのイメージの想起が一人一人異なるのはもちろんのこと、日本人とはまったく異なった彼らの文化に根ざした彼ら独特の発想がなされる。だから、教師は決して日本人的発想のイメージを学習者に押しつけてはならない。

しかし、一方で、国や民族が異なるのにもかかわらず、いくつかの共通したイメージの想起の型があることも明らかになった。

教師の押しつけではなく、学習者自身のイメージの想起であるから、印象深く記憶がより促され、学習が効率的になり、漢字学習への意欲につながると

いえる。

このようにインタビューを用いたイメージ介入による漢字の読みの指導は、効果的であることがわかったが、いつもいつも、教師と学習者が一対一で向かい合い、十分な時間をとって、イメージを想起させ、ストーリーを創らせることによって、漢字の読みを指導（学習）できるとは限らない。したがって、今後はこの方法を基にした実際の教室活動におけるより効果的で実践的な漢字の指導法を考えていきたい。

参考文献

- 石田敏子 1989 「漢字の指導法」『講座日本語と日本語教育』第9巻 明治書院
- 江副隆秀 1987 『外国人に教える日本語文法入門』 創拓社
- 海保博之 1990 「外国人の漢字学習の認知心理学的諸問題 — 問題の整理と漢字指導法への展開 —」『日本語学』11月号 明治書院
- カッケンブッシュ寛子、中条和光、長友和彦、多和田真一郎 1989 「50分ひらがな導入法 —〈連想法〉と〈色つきカード法〉の比較 —」『日本語教育』69号 日本語教育学会
- 加藤彰彦 1989 『講座日本語と日本語教育』第9巻 明治書院
- 高見澤孟 1989 『新しい外国語教授法と日本語教育』 アルク
- 武部良明 1986 「日本語教育と漢字」『日本語学』6月号 明治書院
- 武部良明 1989 「文字・表記の指導」『講座日本語と日本語教育』第13巻 明治書院
- 続有恒、村上英治 1975 『心理学研究法』第11巻 東京大学出版会
- 永保澄雄 1987 『はじめて外国人に教える人の日本語直接教授法』 創拓社
- 堀川直義 1971 『面接の心理と技術』 法政大学出版局
- ミシェル・ドウニ（寺内礼監訳） 1989 『イメージの心理学 — 心象論のすべて —』 勁草書房
- 水島恵一 1988 『人間性心理学体系 イメージ心理学』第9巻 大日本図書
- 吉村弓子 1989 「漢字の指導」『講座日本語と日本語教育』第13巻 明治書院